

僻地・複式校における幼・保・小連携への取組 (1)

—— 総合的な学習の時間を通じて人とかかわる力を育てる ——

小河 泰史・白石 敏行

Approach to the Relationships of Kindergarten, Day nursery school,
and Elementary school for minimal scale school (I)

KOGAWA Yasufumi and SHIRAIISHI Toshiyuki

(Received July 25, 2005)

キーワード：へき地・複式 校種間連携 総合的な学習の時間

1. はじめに

少子化が深刻な問題として受け止められ、行政による政策も取り組まれている。一方で少子化による学齢児童数の減少は、そのまま小学校の閉校、廃校、合併統合などの状況をもたらしている。定数による措置と言葉で説明することは容易だが、地域住民にとって、学校がなくなるといことは、教育的・心情的な拠り所を失うに等しい。「子どもの笑い声が聞こえないと寂しい、はりがない。」という地域の高齢者の声は、長い歴史を重ねてきた、地域で生活してきた者の言葉であるからこそその重みと切なさを併せ持つ。

平成12(2000)年度から14(2002)年度までの3年間在籍していた徳地町立柚木小学校(14年3月の統廃合により、現柚野木小学校)では、地域の保育所と在籍小学校との連携を図る取組を、個人実践の形態で実施した。同じ地域に存在する保育所と小学校とが、幼児なりの発達段階に応じた学びを、また、小学児童としてのねらいを達成していくために保育者・教師はどのように関わればよいのかを模索する基点となるものであった。

本研究にかかわるプロセスとして整理するものとする。

徳地町立柚野木小学校の所在する佐波郡徳地町は、県央にあり、北部に島根県境を有する主として農林業を生業にしてたつ山間の地域である。とりわけ林業の歴史は古く、今から約800年に、かの重原上人が、東大寺大仏殿建立の際の木材を切り出したといわれるほど豊富な森林資源に恵まれ、現在に至っても、滑(なめら)の国有林として語り継がれるほどの美しい自然を背景とした森林を有している。森の巨木百選にも選ばれた『滑の三本杉』は樹齢三百年と言われ、現在も自然豊かな森の中にどっしりとそびえている。一時は隆盛を誇った徳地町柚野地区も、時代の流れと共に、徐々に過疎化の波の影響で、筆者の在籍した平成12年から14年には、小学校在籍児童数10有余名という極小規模の僻地・複式校となっていた。

極小規模校の傾向として、人間関係の固定化や、児童間の話し合いの活性化の困難、表

現力の育成の困難さ等が挙げられる。

複式校は、1・2年（低学年）、3・4年（中学年）、5・6年（高学年）の隣接学年で1学級を構成する。そのため、1つの学級できょうだいや席を並べて学習をするといった状況が生まれることもある。また、一学年に一名のみという状況もままある。そのような中で、児童相互の関わりや、できる限り多様なコミュニケーションの体験をさせることが必要であるとともに、重要な課題ともなる。授業形態も特有である。教育課程には、複式方式とA・B年次方式という二つの方式が存在する。その複式校や、地域により若干異なるが、複式方式とは、例えば国語の学習の1単位時間内で、5年生は「大造じいさんとガン」を、6年生は「海のいのち」という単元を同時進行で学習していく。勿論教師は1人なので、複式方式の授業では教師に「わたり」という技術（あるいは手法）が必要となり、指導案も両学年の指導案と、「わたり」によってどちらの学年に関わるのかが明記される。「わたり」についての詳細な説明は紙片の都合で別の機会に譲る。他方、A・B年次方式は、3・4年教科の学習内容を全て検討し、ねらいや配当時間が概ね同じになるようにして1年目（A年次）の内容と2年目（B年次）の内容に振り分けて実施することを指す。つまり一般校で学ぶ3・4年生の内容を、複式校において3年生で3・4年の学習内容のほぼ半分を学び、4年生で残りの学習内容を学ぶという方法である。A・B年次方式のメリットは、極小規模の学校・学級においても人数が必要な話し合い活動や、グループ形成が可能になる事などが挙げられる。デメリットとしては、系統性という原則に反するという側面がある。これらの状況を鑑み、国語（書写）、算数を複式方式で実施し、理科、社会、生活、総合、音楽、体育、図工、特活などをA・B年次方式で実施している。

実際、複式校に着任するまではこれら僻地・複式校の特殊な教育形態を学ぶ機会はないとあってよいし、同じ管区に僻地・複式校が存在したとしてもなかなかその実態は理解しがたい。しかしながら、子ども一人一人の育ちを支援していくのが教師の役割であるとするとき、その人数の多少にかかわらず、今日の前にする子どもにとってどのような将来にわたって生きる力が必要であるかを見定めていくことが欠かせないと考える。

筆者は極小規模の僻地・複式校の児童にとって、とりわけ支援が必要な力を、人とかかわる力、すなわち自分の考えを表現することであると考え。そして、その支援を必要とする力は、単年度の実践にのみ培われるのではなく、個々の実践や日々の実践の中での体験が薄い層として少しずつ積み重なっていくことによって一人一人の表現力として培われていくと考え、年度を越えた実践を積み重ねていくことを目標とした。

2. 交流学习の必要性と、徳地町の集合学習の歴史

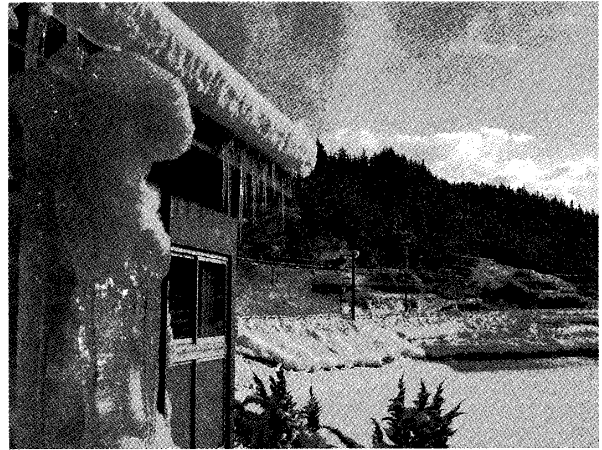
明治5年学制の頒布以降、“邑に不学の者なく”の言葉通り、県内各地の村々に小学校が開校したのは言うまでもない。徳地町もつい最近（平成12年）までは僻地・複式校が5校あった。串、引谷、三谷、柚野、柚木の各小学校がそれである。この5校が集まって集合学習を実施していた。その歴史は意外に古く、平成14年に集合学習が幕を閉じるまで25年以上も前から続いた学習の交流形態だった。その根本概念となるものは、児童の減少により、学級減や複式化を余儀なくされた当時の子どもたちに、できる限り多くの人数での学習の経験を通して、集団で活動することの楽しさや大切さを味わわせたいという教師や保護者の願いからであったようである。

現在は学校統合により、串小、柚野木小の2校となったが、子ども一人一人の思いや願

いを中心にすえて教育活動を考えるとき、これら極小規模の複式校での実践には、実に多くの示唆が含まれることに驚かされる。徳地町で子どもたちと過ごした3年間で、自身の校種間連携の基点となっていると言ってよい。そこで、本論文では、特に保育所・小学校間の連携について整理し、考察を進めていきたいと考える。

3. 僻地・複式校の現状と課題への取組

多くの場合、僻地・複式校の特徴は極小規模、隣接学年の複数学級編成とすることができる。筆者が着任した徳地町柚木小学校のある地域は、四季の移り変わりが実にはっきりとし、豊かな自然に恵まれている。冬は気温マイナス10度よりもさらに冷え込むこともあり、多いときには校庭の積雪が80cmを記録する年もある。夏には裏手の川にアユやギンマス、アカマツと子どもたちが呼ぶ川魚が群れ泳ぎ、秋にはイチョウが葉と実を降らせ、校庭中を黄色く染めてしまう。文字通り子どもたちは自然と共に生き、その恩恵を一身に受けながら育っていく。一方で、学級編成に視点を移すと、課題が明らかになる。先にも記したように、極小規模であるため、学級は隣接学年で編成される。たとえば3年生と4年生が同じ教室で机を並べる。各教室の児童数は3人から、多くても6、7人程度で、複式方式・あるいはA・B年次方式という形態で日々の学習活動が展開される。極小規模であるため、人間関係や序列の固定化など、特にコミュニケーションに関する課題に直面することも多い。そのため、どのような方法で多様な人とのかかわりを意識した学習活動を展開するかに向けての試行錯誤が始まった。



↑教室から見た冬の朝の風景(H13. 1月)

4. 1年次・平成12(2000)年度の取組(総合的な学習)

総合的な学習の時間の取扱いについては、小学校学習指導要領の中で次のように示されている。

「総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的、総合的な学習や児童の興味関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。」(文部科学省, 1998)。

ねらいについても3点次のように示されている。

「(1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。(3) 各教科、道徳及び特別活動え身に付けた知識や技能等を相互に関連づけ、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること。」(文部科学省, 1998)。

校内研修での協議の結果、総合的な学習の時間に関するねらいが学年ごとに児童の現状や発達段階に応じて設定した後に取組が始まった。

中学年(3・4年生)のねらいを、「こだわりをもち学びすすめる子」・「考えを自分

なりに表現する子」・「たがいに学び合い深め合える子」の3点とし、特に2番目の「考えを自分なりに表現する」ことをいかに総合的な学習の時間で達成していくかを重要視した。言うまでもなくこの3つのねらいは日々の生活や学習活動の中で相互に関連している。自分の中にあるこだわりを学びの原動力として問題に取り組み、学んだことから得た自分なりの考えを自分以外の誰か、すなわち他者に伝え、知らせることを通して表現し、その表現し合ったお互いの学びをもとにさらに協同してお互いの学びや育ちを深めていく。この相互作用を教科及び総合的な学習の時間で繰り返えし実践していくことにより、極小規模校の児童に多様な人とのかかわりとかかわり方を定着させていくことをねらいとした。

小学校児童（3・4年生）の「総合的な学習の時間」を軸にした校種間交流の取組 人とのかかわりあいの視点からの出発

3・4年「総合的な学習の時間」の取り組みと実践

総合的な時間は活動の連続ではない。地域の実態や児童・教師の願いが底流にあり、さまざまな場面（教科等）での学習活動を通して、学級・学校のねらいに向かってアプローチしていくものである（表1参照）。極小規模校での1年次の総合的な学習の時間の取り組みも、いくつかの小単元から構成されている。

1学期の実践 地域の豊かな自然を生かして週2回、朝全校で実施するバードタイムで、野鳥の観察と記録が年間を通して続けられた。この活動は総合的な学習の時間とリンクしており、日々の活動の中での発見（オシドリやオオルリなどの貴重種の発見やシジュウカラの子育てなど）を総合的な学習の時間に詳しく調べ、ファイリングして蓄積していく。また、早い時期に近くの愛鳥林でゲスト・ティーチャーを招き、探鳥会を実施した。

表1 1年次の総合的な学習の時間と他の教科の関連

学期	総合的な学習の時間と教科の関連
1学期	愛鳥活動（総合）バードタイム（週2モジュール）探鳥会（愛鳥林）（総合） 柚木の周辺地図作り（社会科） 花の種を植えよう（理科）
2学期	牛乳パックのリサイクル紙作り（総合）ケナフの収穫（総合） 中間発表会（生活・総合）：全校による野鳥研究のポスターセッション 学習発表会 人形劇：「牛乳パックで紙づくり」（総合）
3学期	保育所訪問と人形劇「わるさずきのかっぱ」上演（総合） ビデオレターによる轡井分校児童との交流

人形劇① 牛乳パックで紙づくり 「エコとポリと一緒にリサイクル」

学習発表会を数ヶ月後に控えたある日の総合の時間に、どのようにして自分たちが調べ、活動してきた牛乳パックの紙づくりを伝えようかということについて話し合った。

自分たちが紙づくりで体験した一連の手順を、自作の人形劇で紙づくりのお話を上演して人に伝えようということになった。

子どもたちの意識の中に、「誰に、何を、（いつまでに）、どうやって、伝えるのか」というコミュニケーションのプロセスが次第に明らかになってきた。Ts男の「そうだ。劇で伝えよう。」という一言がきっかけとなり話し合いが勢いづいた。「リサイクル人形を作

ろう。」「顔は牛乳パックや紙粘土で作ろう」「どんなお話にする?」と、伝える相手（他の学年の児童や保護者、地域の人）を意識した児童の話し合いはいつもにまして活気に満ちていた。

人形劇② 保育所幼児とのかかわりの始まり

学習発表会での上演で、校内の他の児童という身近な対象から、もっといろいろな人に見てもらいたいという意欲が4年生の3人にわきあがってきた。3学期の総合的な学習の時間を軸にして、1月末に二本目の台本「わるさずきのかっぱ」が完成し、同じく1月末から各自の人形制作が始まり、2月7日頃人形が完成した。この年は例年になく雪が多く、水道の蛇口から凍結防止に出しておいた水が一夜明けると氷の柱になるほど冷え込んだ年で、時期教室の外は日中でも零下4～5℃を記録し、児童は絶え間なく降り続く雪の中休み時間にも「MYちゃん喜んでくれるかねえ」、「きっとね」と幼児のようすを思い浮かべながらこつこつと人形を仕上げていった。

2月7日以降総合的な学習の時間（計8回）で劇の練習をし、セリフをしゃべりながら人形を動かせるようになっていくのと並行して、保育所訪問の連絡・調整を児童・教師で取りかかり、行き帰りの交通手段の手配から道具の運搬までの段取りをつけた。

3月6日の朝、堀行きのバスで保育所に登園する保育所幼児と一緒に児童4人は保育所に向かった。時間にして2単位時間（90分）ではあったが、近いようで遠かった柚野僻地保育所の幼児と小学校児童とのかかわりの始まりと言ってよい。自分たちが慣れ親しみ、卒園していった保育室を再び訪れた児童が、室内をしげしげと眺めて変わらず置いてあるソファを見て何とも言えずうれしそうな表情をしたのが印象的だった。

まさにここで育った子どもの記憶は薄まることなく原体験として子どもの内に息づいているのを実感するには十分すぎる保育所訪問であり、90分間であった。

他校僻地校とのかかわり（1）

柚野僻地保育所の幼児との交流で自信を得た中学年の児童たちは、もっと別の人に自分たちの作った人形劇をみてほしいという願いを持つに至っている。偶然ある研修会で出会った知己、O教諭の勤務校である豊東小学校轡井分校の子どもたちの話をしたところ、すぐに轡井分校の人達に自分たちの劇を見てほしいという意見が拳がった。同時に徳地町と菊川町の距離をどうするか、また3月初旬というまさに年度末の時期であり、時間的な制約をどうするかという2つの問題に直面した。そんな時Ts男が、「テレビでやりよるビデオレターを送ろうや」とアイデアを出した。そのアイデアはすぐ受け入れられ、これまで練習してきた「わるさずきのかっぱ」のビデオの前後にメッセージを追加編集していけばいいという意見が出た。だが結局児童は劇自体をもう一度演じたものを録画する方法を選択し、休み時間を利用してビデオレターが完成し、発送された。

後日学級の児童宛に轡井分校児童からの手紙が届いた。詳細は別の機会に譲るが、Eメールでのやりとりという新たな可能性の示唆があったことを記しておくに留める。

5. 2年次・平成13（2001）年度の取組（総合的な学習の時間）

保育所幼児と小学校児童（5・6年生）の校種間交流への取組

1年次の総合的な学習の時間を軸にした保育所幼児と小学校児童との取り組みから、双

方にメリットのあるものでなければ相互交流（連携）の継続には結び付いていかないと考えた。そこで、2年次は、年度初めから保育所の武石園長と電話や面談を通じて連絡を密にし、継続して保育所の幼児との交流を通じて、お互いの発達段階に応じた学びの継続と共有をしていくことを確認した。

また、校内研修での由井先生の受指導から学級での総合的な学習のねらいと学校のそれとが一致するべきであるとの示唆から、2年次はより明確に学校の研修課題「自ら学び考え、生き生きと活動する児童の育成 ー地域素材を生かした体験的な活動を通してー」との関連を意識した。

2年次に担任した5・6年の「総合的な学習の時間」は、週約3時間と、バードタイム（朝の自主活動の時間）を用いて、学校の共通テーマである「主として野鳥に関すること」と、「各々の興味・関心に基づくこと」の二本柱でスタートした。児童には生まれ育った地域の環境に目を向けてほしいという願いを伝え、1学期始めに年間を通して自分が取り組んでみたいテーマを決めた。野鳥を中心に活動していくグループは、活動の中で、学校周辺の地図を作成し、バードタイムなどで見つけた野鳥を記入していくことで、地域に生息する野鳥を確認した。リサイクルをテーマにしたグループは、ペットボトルや段ボールなどを材料にして、輪投げ、風で進む船、レーシングカー、スコップなどの玩具を作った。保育所の幼児に使ってもらえることを楽しみにして活動をすすめた。既にこの時点で1年次の体験をさらに膨らませたいという児童の意識が表れ始めていたため、人形を作ってみることを1学期末に児童に提案した。

夏休みの工作で、児童一人一人が経験と工夫を凝らして人形を試作した。昨年人形作りを経験していた5年児童は材料にも工夫を凝らしてクマや鳥の操り人形を作った。

2学期始め、運動会練習の合間をぬって、夏休みに作った人形をもとに劇の台本を作った。話し合いの結果、「自然」、「野鳥」、「キャンプ」の3つのキーワードから1作目の台本「山にキャンプ！」ができた。話は改良の余地があったが児童の満足度は高かった。

台本づくりを通して、児童は保育所の幼児に何を伝えたいのかを念頭において活動することの大切さを実感し、めあての明確化と、達成のための手段を具体的に持って取り組んでいくことの難しさを知った。

10月、行事の合間をぬうようにして実施された高学年の朗読発表会で、児童たちは初めて他の児童、保護者の前で、自分たちの作った人形を操り、一本の人形劇を実演して見せた。納得する表現としての演技はまだまだ未完成だったが、限られた時間の中での準備、台本を覚えての練習、劇を実現させたことで児童たちの心の中には、次への意欲が芽生えたようである。脚本、練習、舞台作りまでを試行錯誤をしながら練り上げることは大変ではあったが、取り組んできたことを自分なりの表現の仕方で、団（友達や家族・地域）に投げかけ、楽しんでもらえる喜びを実感したことが大きかったようだ。

11月のはじめ、「学習発表会に向けての人形劇づくりの活動で、自分が身につけたい力は何か。」という投げかけをした。児童たちは今までの学習内容を振り返り、活動をとおして、自分で身につけたい新しい力について考えた。このことによって、「人形劇を作って、保育所の幼児や地域の方に楽しんでもらう。」という全員の大きな目標とは別に、表2に示したような「この活動を通して身につけたい新しい力」を一人一人が持つことになり、総合的な学習の時間における具体的な活動の視点（めあて）が具体的に定まってきたと言える。

表2 総合的な学習の時間で「身につけたい新しい力とその理由」

児童名	身につけたい新しい力（観点）・理由
Y m 男…	緊張しない力（心情） 理由：人前で発表すると緊張して、セリフを忘れることがあるから。 スムーズに人形が動かせる（表現技能） 理由：セリフに頭が行って、動きがスムーズにいかないから。
A y 男…	器用に手を動かす力（表現技能） 理由：人形に、手の動きが伝わって、生きた動きのようにみせたいから。 大きい声を出す力（表現） 理由：自分のセリフの時に、はっきりと伝わる声を出したいから。
K e 女…	人形がものを持ったり渡したりする動作ができる力（表現技能） 理由：違う人にスムーズに物を受け渡せるようになりたい。 セリフを覚えて台本を見ないで言う力（心情・表現） 理由：台本を見ないで言えるようになりたい。
O t 女…	人形に大きな動作をさせる力（表現技能） 理由：セリフを言っていると動作が小さくなるから大きい動作をさせたい。 セリフを確実に覚える力（表現） 理由：セリフを覚えていると、人形の方に集中してうまく動作できるから。
M m 女…	人形を上手に動かす力（心情）
T s 男…	台本を見なくてもしゃべれる記憶力（表現・技能）
A h 男…	セリフをすらすら読む力（表現） 理由：言葉や文でつまることがあるのですらすら読めるように練習したい。 人形をうまく動かす力 理由：人形が浮かんでしまうので浮かないように気をつけて操る。

これらの個々のめあては自己評価の視点ともいうべきものであり、新たな課題に向けて取り組んでいくうえでの指標となるものである。

12月の学習発表会（三世代交流学習）を成功させるため、児童の思いや願いを生かし、活動をさらに充実させるため、児童たちの「身につけたい新しい力」を基に、教師の評価と支援の方向性も定まった。

児童が目指す活動の目標は、4月当初に全員で話しあって決定した「自分たちで作った台本で、（手作りの）人形劇を、（みんなに）見てほしい。」である。

その際に、「みんな」とは誰なのかと改めて問いかえしてみたところ、「自分たちよりも小さい子」すなわち、「柚野保育所の幼児たち」と「柚木の地域の人」すなわち「家族や三世代交流学習に招待する人」という対象が確認できた。

ここで改めて「自分たちで作った台本で、（手作りの）人形劇を三世代交流学習に招待した人々や、柚野保育所の幼児たちに見て楽しんでほしい」という全体の目標と、この活動を通して「身につけたい新しい力」（めあて）とが明確になり、単元名「成功させよう！柚木人形げき団」が成立した。今後の「総合的な学習の時間」への足がかりができた。

劇づくりの具体例を挙げると、朝の全校読書タイムで、児童たちは、地域の昔話や、民

話などから、脚本の原本になる話題や素材を選んだ。また、チャレンジタイム（国語）を使って、台本を作成した。このように、明確なねらいと柔軟に活用できる学習時間があれば、基礎・基本の充実を兼ねて、児童の関心・意欲を、活動へと高めていくことが可能であると考える。

教科との関連

「教科」と「総合的な学習の時間」は、学習指導要領の両輪ともいえる。表3に示したように、本題材と教科との相互関連は主として国語科、社会科、図工科、家庭科の4教科が該当する（鳥の人形づくりでは、生き物の体のつくりや仕組みといった理科的要素も含まれる。）。

国語科との関連では、お話探しの際の読書活動、幼児に分かる言葉選びの際の意味調べ、台本作成時の視写（全文写し）、筋道の通った文章にするための構成、記述、推敲などの技能が活動を通して高められる。児童の身につけたい力の中に、表現に関するものが多いことから、この活動は重視すべき関連事項となる。

社会科との関連では、地域の民話を探す活動の中で、資料活用の基礎を培うことができる。話の背景となるその土地の気候や風土、登場人物の服装などからは、自分たちとはちがった暮らしを知ることができ、4年で学習したさまざまな土地の人々の暮らし、3年で学習した身近な地域の人々の暮らしを踏まえて、6年の歴史の学習が活動に際して役に立ってくると言える。

特に、複式・A・B年次方式を採用している極小規模校においては、「総合的な学習の時間」により、各教科の目標が少しずつ形を変えて繰り返し児童に提示されることになるため、継続と反復が各教科の基礎・基本の定着を促す。さらに、教師が、学習指導要領及び年間指導計画の流れを意識することで、活動に計画性や発展性が出てくる。

図工科では、技能的なものとして、人形作りの素材選び、粘土の加工技術の習得・向上、彩色技能の修得・向上、手などの感覚器官からの発見、工作道具の扱い方の向上、態度的なものとして、大版用紙を使った背景作りの共同作業、担当箇所分担、相互評価と賞賛による心情と意欲の向上と高揚が期待できる。

家庭科では、布地素材の利用や針と糸の扱い方、縫い方、ミシンの使い方、裁縫道具の扱い方も関連してくる。これ以外にも、教科で扱わない部分も手法として扱うこともある。活動後に、新たな関連が明らかになる場合もあるため、その都度ファイリングを心がける。

評価について

評価は、児童のめあて「身につけたい新しい力」をもとに活動し、時間の終わりに達成のようすを用紙に記録していく自己評価カードや他の児童との相互評価、教師や保護者による評価などを総合ファイルに蓄積（ポートフォリオ）していく。これをもとにして、教師の評価の視点と児童の活動や実態とを照らし合わせながら、高学年の3つのめあてに即し、学期末・年度末に総合的に評価する。

表3 教科との関連

教科	ねらい・育てたい力
国語科	筋道の通った文章にするための構成、記述、推敲などの技能。 相手に伝わるように、はっきりした言葉での発音と発声。 (表現技能)
社会科	資料活用の技能を養う。話の背景となる土地の気候や風土、地域の人々のくらしぶりを考える。 (資料活用) 環境に配慮した再利用(リサイクル)への関心と態度。(興味)
図工科	多様な素材を再利用する面での素材選び。彩色技能や、工作技能の向上。 (技能)
家庭科	布地や糸の素材利用。裁縫などの技術の習得。 (技能)
複式方式・A・B 年次の視点から	各教科の目標が、繰り返し提示されるため、継続・反復して各教科の基礎・基本を定着させることにつながる。

保育所幼児と小学校児童の相互交流の可能性に向けての取組

2003年1月に山口県保育協会佐波支部から発行された『和み合う保育 通い合う心』の中に、柚野僻地保育所と柚木(統合し現在柚野木)小学校の校種間連携の実践が掲載されている。保育所の視点での貴重な資料となるもので、いくつかの実践事例の中に自身の働きかけや取り組み、あるいは子どものようすを客観的に知ることが出来た。そこには、交流の概要と主な活動場所とともに考察が記されている。

以下、保育士の視点からの交流の様子を検討していく。

2002年2月1日(金)に実施した保育所訪問は、タイトル「小学生との交流」の事例として紹介されている。時系列での活動の推移を見ると、①10:20～挨拶をする。②10:30～小学校の人形劇をみる。③11:00～一緒に遊ぶ。④11:30～見送る。と保育所の視点から記録されている。改めて再考すると、ここにも交流活動が小学校の視点と立場で進められていることが見て取れる。

それに続く「事項」では、より詳細に保育士から見た交流と児童の様子がうかがえるのに驚かされる。

①「5～6年生がマイクロバスに乗って来園。日頃あまり関わりがないので、最初、園児も小学生も少し緊張気味であった。」(〃部は筆者による加筆。以下同様)

この時期の保育士には柚木小学校の児童との日常的なかかわりがないという意識があることがわかる。実はこの2003年3月には、柚野僻地保育所と同敷地内にあった柚野小学校が休校となることが決まっていた年で、柚木小学校との統合を2か月後に控えた、そのような地域には大きな変化を迎えた時期だったと言える。

「OK男は小学生の中に自分の姉を見つけて喜ぶ。園児も小学生もあまり会話を交わさない。」

ここにも小学校児童の若干のとまどいが見て取れる。複式校では、きょうだいと同じ教室で学ぶこともある。そのような時には、きょうだいであり、クラスメイトであるという一種独特な雰囲気があるのも事実である。日本の学校教育がいかに同年齢での学習を基

本におくあまり異年齢での学習という意識を育てていないとすることができるかもしれない。

②「小学生が手作りした人形で演じている劇を見る。園児は友達としゃべることもなく、静かに見ている。

ここは判断が難しい。ちょうど当時のビデオテープがあり、わずかながら幼児の表情には、笑顔や劇に夢中になっているような様子が見て取れる。。しかし、交流全体を通して、小学生と幼児とのフォーマルなふれあいはあっても、インフォーマルなやりとりは少なかったように感じる。

ここに保育士と小学校教諭の意識の差があると考えられる。つまり、児童が人形劇を中心に保育所訪問を実施しようとしているのに対して、幼児は人形劇を見ることだけが目的ではない。日ごろ接する機会の少ない小学校の児童（兄や姉を含む）との出会いそのものを楽しむことに重点をおくべきではなかっただろうか。

双方にメリットをと考えるならば、事前にもっと保育士と役割分担について打ち合わせしておくことも出来たであろう。それが幼児の心の安定につながっていったとも考えられる。

「劇のあと、人形と触れ合っているうちに少しずつ和やかな雰囲気も出てきて、お互いの緊張感も解けてきた。「人形と握手していいか？」と、KM男。うれしそうに人形の手を握っている。他の子どもに、「どの人形が好き？」と聞くと、IA女は「ウサギの人形がかわいいから好き」と言い、OK男は姉の持っている人形を黙って指さす。

ここでは、幼児の緊張がほぐれ、次第に活動的になっているようすがうかがえる。一方、小学校児童はこの時点でもやや緊張気味だった。なぜならば、総合的な学習で人とのかわりへの取り組みを模索していく意義がそこにあるからである。極小規模校の児童は、保育所時代から限られた少ない人間関係の中で育っていく傾向がある。心の中では見聞きしたさまざまなことから感じたり考えたりしている。しかしそれらを自分なりに表現し、伝えるまでになかなか至っていない。それゆえの間接教材としての人形であり、人形劇なのである。人形劇を通すということは、自分たち自身による劇よりも表現の難易度は容易になり、指人形よりも劇化に要するプロセスでは難度を増すと考える。思いはあってもなかなか自分の中にある気持ちを表現しにくい傾向を持つ児童の割合が多い高学年に対して人形という媒介物は、幼児とより積極的にかかわる機会を増やすことができたと考える。

3人の幼児の反応も三人三様で興味深い。IA女がかわいいと言ったウサギは、Mm女の作成した人形で、二人は家が近いことから普段から遊ぶ機会もあった。どちらかという寡黙な印象の強いOK男はやはり姉であるOt女とのつながりが大きいことがわかる。やんちゃなKM男は、人魚に対する関心の高さから、劇中に動く人形を触りたくて触りたくて仕方がない様子がビデオからもわずかだがうかがえた。

③「たくさんのおもちゃが小学生よりプレゼントされる。園児達は身を乗り出しておもちゃに興味を示す。「みんなで仲良く使おうね」と約束する。」次に、みんなでジャンケン列車の遊びをする。一回目はアツという間に終わり、小学生の一人の「もう一回やろう」という言葉で二回目もする。3歳のHA女はジャンケンで一番になり、とてもうれしそうに笑顔を見せる。

この頃になると、訪問当初は緊張して、固い表情だったYm男やAh男たちも楽しそうな表情に変化し、幼児に対して自分なりの気遣いを見せながらジャンケンをするようすがビデオから見とれた。

④『アツという間に午前中が過ぎ、小学生の帰る時間になる。「また来てね」、「また、いっしょに遊んでね」と声を掛け、みんなで車が見えなくなるまで手を振り、見送る。』

1年次よりも一緒に過ごす時間は多少長かったが、小学校に戻るバスの中では、劇をやり終えたという安堵感と幼児と楽しく過ごせた満足感からだろう、口々に自分たちの劇の批評や幼児と遊んだこと、また話した事柄などが話題にのぼり、尽きることがなかった。

考察（保育士からの視点）

日頃あまり関わりのない小学校との交流で、子ども達にしばらくの間とまどいや緊張が見られ、言葉を交わすこともほとんどなかった。しかし、人形劇を見たり、手作りの人形に触れたりするうちに、笑顔や会話する姿が徐々に見受けられるようになった。ジャンケン列車と一緒に遊ぶ頃には、とても和やかな雰囲気になった。今度、一緒に遊ぶ機会があれば、すぐに馴染んでくれると思う。保育所以外の子ども達との関わりがあまりない地域なので、これからも小学生達との触れ合いの機会を多く作っていきたい。

（山口県保育協会佐波支部 和み合う保育 通い合う心，2003）。

ともすると人とのかかわりが固定化しがちな極小規模校にあって、身近な人とのかかわりあいを少しずつ広げていく意味で、地域の公的（教育）機関との交流をくりかえし継続していくことの効果があがってきていることが確認できた。

他校僻地校とのかかわり（2）

昨年度に引き続き、豊東小学校轡井分校の児童に人形劇のビデオレターを3学期に送った。この年の3月をもって轡井分校は本校である豊東小学校に統合されるという連絡を受け、分校担任のN教諭とせっかく実を結び始めた交流が消えてしまうことを惜しんだ。後日轡井分校児童からの丁寧な封書による返事をもらい、柚木小児童は自分たちの他にも廃校になる小学校があることを知り、送られてきた手紙を何とも形容しようのない表情で読んでいた。

2003年3月31日に柚木小学校は廃校、柚野小学校は休校となった。豊東小学校轡井分校は本校に統合された。

2年次までの研究の成果と3年次の課題

児童のめあてが「自分たちで作った台本で、（手作りの）人形劇を、三世代交流学習に招待した人々や柚野保育所の幼児たちに見て楽しんでほしい。」と、活動の広がりにつれて具体性を増し、明確になっていったことは、学習が深化・充実してきたことの表れと見ることができる。

教科と「総合的な学習の時間」との関連を重視して指導することは、新学習指導要領の要といえる。本単元では、国語科、社会科、図工科、家庭科の4教科の相互関連を図りながら指導方法を模索した。

「活動あって学習なし」にならないためには、指導者としてそれらの活動を通じて何を伝えさせたいのかを念頭におくこと、また目標の明確化と達成のための手段を具体的に持って取り組んでいくことが大切であることと人形劇という形にこだわりすぎずに児童の主体的な思いが尊重され活性化される活動の模索が示唆され、今後さらに研究を深めていく必要性が明らかになった。

6. 3年次・平成14(2002)年度の取組(総合的な学習)

保育所幼児と小学校児童(3・4年生)の校種間交流への取組

1・2年次の総合的な学習の時間を軸にした保育所幼児と小学校児童との取り組みから、人とかかわりに重点をおいた相互交流(連携)の継続をさらにすすめていくことを考えた。そこで、3年次は、柚野僻地保育所と年度初めの早い段階で交流活動を実施することを提案し、快諾をいただいた。そこで電話や面談により連絡をとりあい、よりよい交流を通してお互いの発達段階に応じた学びについて連携していくことをめざした。

ふるさと学習の一環としての地域探検

3・4年生社会のA年次単元で調べた柚木地区のことや児童が作った地図をもとにして『わくわく校区探検に出かけよう』を保育所の幼児と一緒に実施しようと児童が計画をし、クイズラリー形式で楽しみながら地域を探検し、相互交流を深める場とした。年度初めに申し合わせていたので、担任教諭と保育士間の電話での調整で実施が確認されていた。

目的を『保育所と小学校の共同開催により、中学年児童においては、自分たちの学習活動の一環として調べた内容を発表する体験を通して、相手を意識して表現することの大切さを知る場とする。保育所の園児にとっては、身近な小学生とのふれあいを通して、人との関わり方を体験の中で身につけるきっかけとするとともに、発達段階に応じた自己表現の場とする。』と、小学校・保育所双方の目的を明確化し6月12日(水)に実施した。

教育課程への位置づけは3単位時間(社会1・総合2)とした。ワゴンでの移動場所は、柚野木小校区で、大原湖キャンプ場から愛鳥林、高巣、風呂橋、川上(仏峠)と、統合により広がった校区を中心にした生活道路を端から端まで回る、文字通り探検だった。

不明な点や必要なことは、双方の担当(教諭と保育士)でその都度協議し決定、実施することを予め申し合わせておいた。

2年次の保育所幼児との交流活動同様、小学校児童に対しては「活動を通して、保育所の幼児にどんなことを伝えたいのか」をよく考えて準備をすることに加えて、「幼児も児童も楽しみながら校区探検できる」ことの大切さを価値づけながら活動をしていき、当日を迎えた。

『和み合う保育 通い合う心』(山口県保育協会佐波支部, 2003)の中には柚野僻地保育所と統合後の柚野木小学校の校種間連携の実践も掲載されている。以下、3年次の取り組みについても保育士の視点での交流の様子と変容を検討していく。

小学校との交流 ① 9:45~柚野木小児童と合流 ② 9:55~校区探検出発
③ 11:40~お別れの挨拶 ④ 11:50~保育所着

①「柚野木小学校3~4年生と担任の先生がマイクロバスに乗って保育所に到着。園児は車が到着するのを楽しみに待っていたので、車が見えると、嬉しそうに迎えていた。みんなで、「おはようございます」、「よろしくお願いします」と挨拶をしてから、保育所の子ども達が車に乗り、出発。」(部筆者加筆。以下同)

小学校の児童の到着を待っている幼児の様子がよくうかがえる。総合的な学習の時間に、他施設を訪問する際など、交流活動自体が注目され、前後の様子はなかなか把握しにくい。本事例のように記録に残っていることで、幼児・児童相互にとっての见えないもの(表情やしぐさ、感情など)が見える形として評価やふりかえりの場面で生きることがわかる。

②「最初は愛鳥林に行く。目的地に着くと、小学生が誘導して、その場に合ったクイズを園児に出す。園児向けのわかりやすいクイズだったので、年長児は「わかった」と、すぐに三択の答えの番号の前に行っていた。年少児や3歳未満児の子どもには少し難しいかなと思ったが、それでも一緒に参加して楽しんでいた。」

小学生が調べた校区の名所・親しみのある場所や橋などを、幼児という自分たちよりも年齢の低い対象に伝えるという準備の中で分かりやすい言葉を選択したり3つの選択肢から選ぶ形式にしたりと自分なりの工夫をこらしてきた。児童はその規準を『わかるか、わからないか。』という漠然とした基準で、言い換えれば直観で判断しながら当日の準備をしてきたといってもよい。これは一見乱暴なようにも見えるが、実は児童の中にある保育所時代の自分の経験と照らし合わせながらの活動とすることができる。実に理にかなった手法と言えよう。そして、年長児と児童のやりとりを見ることで、年少児や未満児は3択でのクイズのやり方、すなわち手順を学び取っていくのである。一緒に参加するということと、参加すること自体を楽しむということは幼児期の子どもにとって重要な要素であり、そのことを裏付ける一つの事例と言ってもよい。子どもは「理解して学ぶ」だけではなく、「誰かと一緒に見たり、聞いたり体験したりしながら学びとっていく」のだと考える。

「その後、大原湖キャンプ場から風呂橋、仏峠（県境）へとクイズを楽しみながら移動していった。車中では、小学生に甘えたり、抱っこしてもらったり、話が弾んだり、とても良い雰囲気であった。最後のクイズの後、全員に正解に応じて、手作りの賞状とメダルを一人ひとりもらう。「ありがとう」と言って、とても嬉しそうにもらっていた。」

2年次の取組から、活動を細分化するのではなく、一つの大きな枠組みでとらえ、移動の際にも幼児と児童と一緒に楽しくかかわれる雰囲気を準備段階から心がけた。子どもたちは五感を通して教師や保育士から多くのことを学んでいる。表情や視線一つからも指示的雰囲気なのかどうかを得ていると考える。つまり、楽しい校区探検に保育所の幼児と出発できるかどうかは準備の段階からスタートしていると言ってよい。児童と教師が無意識的・意識的に培ってきた楽しさを、幼児が直感的に評価し児童と教師にフィードバックしてくれたことになる。校種間を越えた交流活動には、Plan-Do-Seeの各段階、特に“See”の部分に、幼児（交流相手）という他者評価が加わることが、極小規模校の児童にとって有益であると言える。

③柚野木小学校の校庭で児童と別れる。「また一緒に探検したい」とKM男。「2回目の探検に行けるよう計画を立てるから」、「楽しいクイズも考えちょくね」と、児童からいわれ、園児も喜んでいた。

バスを見送る児童にとって、幼児の次回への期待の言葉は「やってよかった」「またやりたい」という意識へとつながっていく。かかわりをもってよかったと感じる瞬間である。

④保育所に着く。「何が一番楽しかった？」と聞くと、みんな「クイズ！」と答えていた。疲れも見せず、もらった手作りのメダルを大切に持っていた。

児童はみんなに手渡せるようにと幼児の人数分用意したメダルを受け取ってもらったことで満足感を覚えていた。幼児にとってはこれまでの交流の継続で、児童が身近な存在になってきているようすがうかがえ、校種間交流の成果が子どもの姿から明らかになった。

表4は②の愛鳥林でのクイズのようすをVTRから記録したものである。VTRは筆者自身が撮影した。検討は別の機会に譲るが実に多くの示唆が含まれているのが分かる。

表4 愛鳥林でのクイズのVTR記録

VTR記録より AM10:05~10:15 (一部抜粋)	
	(愛鳥林について)
O t 男	はい、ならんでね」
小T	t 男君、列はええけえね、あの、ぱーっとつれてってあげ。ね。」 (走るように先導するO t 男、K r 女)
小T	t 男君について行って下さい。」
保T	は～い、t 男君について行って下さい。」
保園T	…さあ、みんないけるかね？一番達者なのがI Aちゃんじゃね。」 (愛鳥林内の木陰で小学生3人並んでいる)
K r 女	ようこそ来て下さいました。今日のために一生懸命練習をしてきました。 みんなで仲良く…えっと、クイズをして、ケガをしないようにしましょう。 これで終わります。」 (保育園児は保育士にはさまれるようにして長いすに全員座っている。)
O t 男	「この上の屋根は、どんな形でしょうか？1番サカナ、2番トリ、3番…」 (O t 男ここでつまって言葉が出てこなくなる。)
小T	「クジラじゃったっけ？」
O t 男	「クジラ。 ど～れ～だ？ちょっと立って下さい。」
保園T	「はい。」
保T	「立ってみて。」(保育園児を促すようにして立つ。) (保育園児が実際に見上げて確認できるような時間をとる。1～3の番号札を頭の上にあげて小学生3人が並ぶ。その番号の前に保育園児が並ぶ。) 保Tの援助によって、番号のところを歩んでいるのが分かる。
保園T	Rちゃん、サカナじゃったら1番よ。そうそう。
O t 男	正解は、2番のトリです。
保園・T	わ～。 … (後略) …

考察 (保育士の視点)

これまで保育所内での小学生との交流はあったが、今回初めて野外での交流をする。小学生は学習の一環として、調べた内容を保育所の子ども向けのクイズにアレンジして楽しませてくれた。どんな関わり方をするのか見守っていた。小学生は、丁寧に、ゆとりを持って接していた。子ども達は小学生だけではなく、小学校の先生との触れ合いもできて、名前も覚え、小学校がますます身近なものになったように思う。

メッセージ

小学生との関わりをもっと持ってみませんか？子ども達は素直に小学生から色々なことを自然に学んでいきます。子ども達にとって、小学生との関わり自体が冒険や探検なのです。
(山口県保育協会佐波支部 和み合う保育 通い合う心, 2003)。

2年次までの試行錯誤により、総合的な学習の時間を軸にした保育所と小学校の交流は、

幼児と児童の交流から少しずつ校種間連携に移行しつつあると考える。担当者同士の連絡調整により、お互いのねらいが年度を重ねるごとに明確に意識できるようになっている。また、年長児にとっては1年足らずの間に小学校入学を迎えるため、少しずつくり返し校種間の交流活動を継続することで、多様な人のかかわりを学習活動に位置づけることが可能となると考える。

わっしょい総合保育祭りへの取組

総合的な学習の時間の取組を軸にした保育所幼児とのかかわりは、その後も行事や学習活動に位置づけられて継続していった。2学期に貴重な転入生を迎えた3・4年児童は、特に3学期のわっしょい総合保育祭りにおいて保育所の幼児を教室に迎え、五角形の教室の利点を最大限に生かして配置した児童一人一人の店舗（お店屋さん）でお菓子屋、手芸店、くじ引き屋などを準備して祭りを開き、保育所幼児とのかかわりを一緒に楽しんだ。概要のみを記すに留めるが、極小規模校においては、一人の転入生が、普通学級（40人定員）の10人に相当するほどの影響力を持つ。学校が友だちという人とかかわりを通して多くの学びを保障する場であることが、浮き彫りにされたといっても言い過ぎではないだろう。いずれ機会があれば祭りの準備の様子や、子どもたちの活動と意識の変容を整理したいと考える。

7. 研究の成果と今後の課題

3年間の保育所と小学校の交流を通して、相互にメリットのある交流活動とは何なのかその方向性が明らかになった。すなわち、

- 幼児にとっても児童にとってもかかわりあいを通して発見や学びがあること
- 保育案や指導案に相互のねらいやめあて等を記述し、共に援助・指導すること
- 1回、1年間での交流ではなく、保育所入所から小学校卒業までの息の長い交流活動を意識すること
- 幼児はやがて児童（小学生）となることを意識して交流活動を通じて学校に慣れ親しませていくこと

これら4点を保育所と小学校の教職員がそれぞれの立場で念頭に置きつつ進めていくと、交流活動は校種間連携となり、より子どもの成長に効果のあるものとなると考える。

一方で課題もまたいくつか浮き彫りにされた。いくつか実践から得た事例を挙げる。

- 保育所と小学校の立地条件による距離による連携の困難
- 保育所と小学校の生活時間の違いによる交流時間調整の困難
- 保育所の年間保育計画と小学校の年間指導計画の検討
- 保育所保育士と小学校教職員間の意識の差

課題は山積であるものの、極小規模校同士の連携にはいくつもの希望がある。それは、保育士と教師の双方に思いがあれば尚、保育計画や教育課程に位置づけて相互交流を実現して生きやすいという点である。お互いの顔が見え気持ちを理解し得たとき、交流活動の芽が生まれる。その小さな交流活動の芽を育てていくのは「こんなことができないだろうか」、「これならお互いにできそうなんじゃないか」というように、小さなひらめきの共有と試行錯誤の積み重ねであると考えられる。大切なのは交流活動を継続していくことである。

少しずつしかし確実に交流の場を重ねていくことで、互いの姿が見えないときにもお互いの存在を意識したそれぞれの生活が営まれていくと考える。

年数を重ねていくことで、ともすると何のために交流活動をするのかがぶれてしまったり、戸惑ってしまったりする時期が訪れるかもしれない。その時のために一つだけこだわり続けたいことがある。それは、子どもの育ちである。もっと言えば、子どもの中に今何が育ち、何が育とうとしているのかを、教諭・保育士をはじめとする大人が支えるために保育所と小学校の相互交流学習の場が必要であると考え。なぜなら、子どもの育ちは常に連続している。留まることを知らないといってもよい。今こうしている瞬間にも目の前の子どもたちは成長している存在なのである。

保育所で育まれてきた子どもの内なる育ちを小学校でしっかりと受け継ぎ、さらに次の段階に引き継いでいく。子どもを渡すのではなく、子どもの中にある育ちをなんらかの見える形にして引き継いでいくための関係づくり・環境づくりと言ってもよい。

そして、もう一点、制度から見た困難も存在する。すなわち所管の違いである。文部科学省と厚生労働省の管轄の違いを挙げたときには、さらに困難が複雑化する可能性を持つが、それでも子どもの内なる育ちを小学校で受け継ぐことにこだわるのは、制度を越え、立場を越えて大切にすべきものがあるからである。校種間で議論すべきは子どもの育ちをつなぐ取組という1点を中心に据えたとき、次に進むべき方向が見えてくると考える。

引用文献

文部科学省 小学校学習指導要領 1998年 国立印刷局
山口県保育協会佐波支部 編 和み合う保育 通い合う心 2003年1月15日

参考文献

全国へき地教育研究連盟 編 21世紀を拓く教育シリーズⅢ
へき地・複式・小規模学校Q & A—新学習指導要領に添う新しい研究推進のために—
2000年9月25日発行 太平印刷